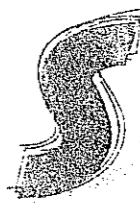


自分の最期自ら決定

「いのち」と向き合う人々

ストーリー



「靖子は『痛みで心が折れてしまう前に、人生を終わらせたい』と強く願っていました」

月半ば。アムステルダム近郊、アムステルフェーン市の住宅街にあるネーダコーン家の居間で、ロブさん(69)が安楽死で逝った妻に思いをはせた。手術や放射線治療で闘病を続け、52歳を迎えた97年春に骨転移が見つかる。想像を絶する痛みに襲われ、10代で海を越えた文通を始め、1972年夏に待ち合わせしたロンドンで恋に落ち、12月にアムステルダムで筆式した。ロブさんは高校の英語教師、靖子さんの選択だった。

「迷いはありませんでした。でも、靖子は自分の病状も知らずになんか亡くなった姉の最期を悲嘆して、『自分の最期は自ら決める』と思いを募らせ、私はそれを尊重しました」

夏が終わり、痛みは限界に達して衰弱が進んだ。医師の同意を得て「安楽死の要請書」を作成した。

そして9月17日の夕刻、別れのパーティーを開いた。家族と友人がベッドを囲み、ワインで乾杯。ロブさんがマグロのすしを靖子さんの口に運ぶと、「(しょ)うゆの(つけすぎ)とつぶ

やいて、小さくほほ笑んだ。午後8時、医師が来訪。子供と友人は夫婦を居間に残してキッチンに移った。「ありがとう」「また」て考えてみないか」

今春、長野県松本市にある神宮寺の住職、高橋卓志さん(65)に誘われて旅に出た。終末期の緩和ケアに取り組む英国と、安楽死を認めるスイスとオランダを巡るスィスとオランダを巡る

あの日から17年。ロブさんは時折涙を浮かべながら、記憶の糸を紡いだ。

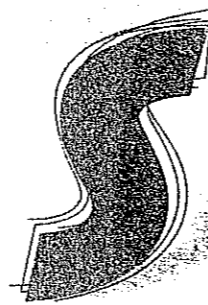
靖子さんは家族に残した日記に、感謝と別れの言葉を綴り、「ありがとう」を繰り返す。本

「人生のしまい方について考えてみないか」

毎日(東京)・朝刊
2014年5月18日(日)

「一人称」で見直す

ストーリー



「これまで多くの死に接してきたが、死をまるで人ごとのように一人称のまなざしで見ている。高齢者の仲間入りをした今、一人称の視線で死を見詰め直そうと思う」

昨秋、長野県松本市の住職、高橋卓志さん(65)はこう言って、旅を持ちかけた。一人称のまなざし」という言葉に、私は心をかきたてられる思いがした。

「これまでに多くの死に接してきたが、死をまるで人ごとのように一人称のまなざしで見ている。高齢者の仲間入りをした今、一人称の視線で死を見詰め直そうと思う」

「昔」と呼ばれた先輩は、遺囑を前に末期がんを患い、最期の日々を「生きる者の記録」というタイトルで新聞連載した。私はペンを持ってなくなった先輩に代わり、病床の傍らで口述筆記を続けていた。

臨終の前日。呼吸困難に陥った先輩に「いよいよか?」と問われた私は「鎮痛剤をもっと増やすとそのまま眠りにつけるそうです」と医師の言葉を伝え、先輩

いかけは、先輩の享年に並ぼうとする今日まで、続いている。

片や高橋さんは、一貫して「生老病死」の現場に関わってきた。終末医療や葬儀について意思表明をする「リビングウィル」の普及に努め、地域のお年寄りのためにデイサービスを始めた。

アルバムを広げながら故人の思い出に耳を傾け、故人や遺族の意思をくんだ葬

「よき死」とは何か

人生の「しまい方」を考える



街中にある広大な公営墓地。その一角は芝生が広がり、土中には遺骨が埋葬されていた。この日も野辺の送りが行われていた。いずれもチューリヒで

高橋さんとの出会いは12年前、「兄貴分」と慕う佐藤健記者に紹介された。自らの得度体験を記事にして「宗教記

は迷うそぶりも見せずに「それを頼む」と即答した。

あれは「死の選択」だったのか? 問

儀を営み、寺の財政や葬祭費を全て公開して、寺の在り方を模索した。

旅を発起した原点には、先代の父親(享年81)の死があった。

1992年に前立腺がんで倒れた先代は、激痛に襲われても周囲を気遣い、下の世話をしてくれる看護師を「これが本当のくそ坊主」と言って笑わせた。

高橋さんはそこに「禅僧」の姿を重ねたが、後に母親から先代の残したメモを見せられてがくせんとした。

体の痛みや不調を書き連ね、最後に「精神的不安定というか、万事アセリ感じる」と記し、「アセリ」の脇に波線があった。

「父は常々『死とは、げたを履いて隣家に行くようなものだ』と話し、臨終の際までそれを演じた。でも内心は不安や苦しみであふれていたのだらう」

かくして、高橋さんの胸中に「一人称の死」が芽吹いていた。

今回の取材は

萩尾信也(東京社会部部長委員)
1980年入社。社会部、外信部副部長などを経て2011年から現職。03年の連載企画「生きる者の記録」で早稲田ジャーナリズム大賞を受賞。東日本大震災で長期連載した「三陸物語」には日本記者クラブ賞が贈られた。今回、写真も担当した。

【次ページにつづく】

旅には、2人の同伴者が加わった。第一生命経済研究所のライフデザイン研究本部主任研究員の小谷みどりさん(45)。大手電機メーカーに勤めていた同い年の夫が東京都内の自宅で急逝したのは、3年前の東日本大震災からひと月後のことだった。

「朝、起きてこないのでも部屋をのぞいたら、亡くなってた。変死扱いされて、司法解剖に回され、『内臓は5年間保管します』と言われて、抜け殻のようになって戻ってきた」

中間管理職の夫は多忙な決算期に加えて、福島第一原発の放射能汚染を恐れて外国人上司が国外に脱出したため、休日返上の激務が続いていた。

「後で労災と認定され、死亡診断書には『心不全』とあったけど、その原因は分からないまま。『どうしたん』と夫に聞くことも返事はない」



名古屋で医療関係の翻訳業をしている辻本淳也さん(38)は、出発直前にメンバーに加わった。

母好子さん(享年82)の墓がある高橋さんの手を訪ね、旅に誘われた。「母が結んでくれた縁」と直感したそう。高橋さんと好子さんは「志をひとつにする盟友」だった。

3年前にがんで逝った好子さんは、医

療を消費者の視点でとらえる活動の先駆者だった。医師の見立てに患者がものを言いつらかった90年代に、「賢い患者になつて医療者との対等な関係を築こう」とNPOを組織して、患者目線で医療機関の評価をし、両者の橋渡し役を務めた。

2010年夏に進行性の胃がんの転移が見付かり、余命を告げられた。入退院を繰り返して、大阪の自宅に戻った時は、淳也さんが泊まり込みで介護した。

「母は闘病中も、人の前では仮面をかぶるようになってからか賢い患者を装っているように見えました。医療者や患者仲間にも弱った姿を見せなくなかったのだと思います」

淳也さんの述べた。好子さんは、医師の立ち会いで延命治療の拒否と葬儀と相続についての指示を

個人の人格、思いを尊重

英国北部スコットランドの首都エディンバラは、桜のつぼみが寒の戻りに震えているように見えた。

最初に訪ねたがん患者支援施設「マジースセンター」は、地域の基幹病院の敷地にあった。安らぎを感じさせる木造2階建てのドアを開けると、あちこちで来訪者やスタッフが談笑し、さながらサロンの趣だった。

著名な建築評論家がかんで逝った妻の遺志をくみ、96年にエディンバラで開所した。開放的な建物には中庭や暖炉付きのリビングやキッチンやカウンセリングルームを完備。現在は国内15カ所に広がり、海外でも開所の動きが始まっている。

がん専門の看護師や臨床心理士が常駐し、病院の患者に限らず誰もが自由に出入りして、医療相談やカウンセリングやセミナーを無料で受けられる。年間80億円の運営費や人件費は全てチャリティでまかなわれ、それが社会に認知された証となっている。

「患者や家族に診断や治療についての正しい情報を分かりやすく伝え、不安や悲しみを抱える人には気持ちを吐き出せる場所を提供する。指示はせず、相手の人格と思いを尊重して支援します」

40代のアンダーソン施設長は、仕事に誇りを持っていた。日本と同様に財源の確保や地域格差の問題は存在するが、英国には無償で在宅医療や訪問介護を行う国営医療制度があり、一人暮らしでも24時間介護が可能だ。高齢者の多くが自分の家で暮らし、家で逝くことを望み、病院で亡くなる高齢者は半数を切っている。日本では死者の8割が病院で亡くなる。

英国の介護体制を支えるのが支援施設だ。がん以外にも心身に病や障がいを抱える人々の生活をサポートする施設が各地に存在し、スタッフが自宅訪問や相談に当たっていた。

「孤独死」は、よほどの社会的背景がない限り、ニュースになることはない。

「だって、人が死ぬ時は一人に決まっているじゃない」。何度もそんな言葉を耳にした。

「文化や歴史の違いもあり、我が国では安楽死は法的に認められていない。ただ、本人の希望で苦痛を取り除くために医師がモルヒネなどを増量し、結果的に死が早まることはあります。安楽死を認めることが死の選択を尊重することだ」と

すれば、私たちの活動は生きようとする意欲をサポートするものです」

アンダーソンさんに安楽死について尋ねた際の答えだった。



四方をアルプスの山々に囲まれたスイス中部の都市チューリヒは、春の陽気だった。花々に彩られた広大な公営墓地を抜けた住宅地の中に、白壁の2階層が現れた。インターホンのブリートに、「EXIT(出口)」の文字。自発的安楽死に取り組みNPOだった。

病気やけがで心身に回復し難い苦痛を抱える人々が、自らの人生に終止符を打つと決断した時、手助けをしている。呼び鈴を押すとドアが開き、統括責任者のハンスさんがにこやかに迎えてくれた。70年代に日本で英語の先生をした経験があるという。

会員はスイス国籍か永住権の所有者で、平均年齢は63歳。人口800万人の国で会員は7万人を数える。医師の同意を得て、自ら人生を終える意思を「事前指示書」で表明する。会費は約3000円。

昨年は約800人が「協力を」を依頼し、半数近くが実行した。その多くは自宅や家族や友人に別れを告げ、薬を飲んで人生にピリオドを打った。事後、EXITが警察に届け出て、合法性のチェックを受ける仕組みになっている。

ハンスさんはデータを示しながら説明していった。「賛否両論があることは承知していま

すが、私たちは安楽死を耐え難い痛みを緩和するための選択肢のひとつであり、緩和ケアの延長線上にあると考えています。今では、国民の8割近くが私たちの活動に理解を示してくれています」

「自殺の助長にはなりませんか」「社会的弱者や貧困は理由になりますか」。私たちは質問した。「自殺イコール安楽死ではありません。私たちが質問した。

「私たちの活動は、一種の自殺予防だと思えます。安楽死をするかしないかではなく、選択肢を持つことで多くの人が心のやすらぎを得ています」

「直前に中止する人もいます。気持ち揺れるのは当然です。私たちはそれも本人の選択と、尊重します」

「個人の尊厳」を重んじる価値観に根ざしているように思われた。同じ印象は、アムステルダムにある「NVE」でも感じた。「オランダ死の権利協会」の略称だ。人口1600万人の国で15万人が会員に登録している。活動内容は「EXIT」と同様だ。

「30年近く議論を重ねて、01年に安楽死を容認する法律が成立しました。個人の尊厳と権利を尊重することに重きを置く国民性が、(死の)自己決定を可能にしました。尊厳を持って生きることを、尊厳を持って死ぬことは隣り合わせなのです」

運河のほとりのビルにある本部で、最高責任者のペトフさんはそう言った。そして、旅の終わりに私たちは、97年に妻を安楽死で見送ったロブさんを訪ねた。安楽死を容認する法律の成立前ではあったが、すでに事実上許容されていた。ロブさんは言った。

「私たちは、痛みや死について、深く語り合った。そして、お互いの考え方を理解し、不安や恐れを分かち合った。だから、硝子の息が止まった時は『これで、

記した「事前指示書」を作成している。日本では法的に未整備だが、欧米では法的効力を持つという事前指示書には、意識を失った場合の代理人として淳也さんの名があった。

最後に帰宅した際の母親の姿は、淳也さんのまぶたに焼き付いている。「『トイレだけは自分で行く』と繰り返してきた母が、『手伝って』と弱音を吐いて、抱きかかえるようにして連れて行きました。ベッドに戻って、しばらく黙り込んでから、『帰る』とつぶやいて病院に戻りました。寂しげな横顔を覚えています。心が折れたのだと思います」

2週間後、好子さんは淳也さんにみとられて息を引き取った。

人生のしまい方を考える欧州の旅。それぞれに向き合う死の風景があった。良いのだ」と感じたし、キッチンで待機していた子供たちや硝子の友達には『みんなで祝福してほしい』と声を掛けた。哀愁を帯びた口調は私たちの心に刻まれている。

価値観や先人観を揺さぶられる2週間の旅を終え、私たちのまなざしは確かに変わった。

「気付きや学びの多い旅でした。死んだ母がプレゼントしてくれたように思います。断絶してとらえていた生と死が、今はつながって見えるようになりました。これは淳也さんの感慨である。小谷さんは言う。

「欧州の人々の思いに触れて、日本人は死を残された者の視点で論じているのではないかという思いを強くしました。それでは、いのちに対する個人の尊厳や自己決定は根付かないと思います」

そして、高橋さんは帰国後、松本にがん患者の支援施設を設立する準備を始めていた。

「生き方や死に方を一人称のまなざしで論じ合える場所づくりをしたい。何事も先人観を持たず、目をそらすずにいきましようよ」

「安楽死」という日本語は英語の「euthanasia」の翻訳で、語源は「よき死」を意味するギリシャ語に由来する。病苦や死の恐怖から解放され、安らかに逝きたいという願いは、古来続く万国共通の思いである。

「よき死」とは何か? 「よき生」とは何か? のように突きつけられた問いである。

